



羅針盤



中西 健史

Takeshi Nakanishi

滋賀医科大学皮膚科 特任准教授

コラボは楽しい

「日常診療で役立つ糖尿病足病変とフットケアの知識」というタイトルで、本誌の企画をいただきました。そもそも私がこの領域に足を踏み入れることになったのは、前任地の大阪市立大学時代に当時の教授である石井正光先生の、「最近、やたらと糖尿病で足に潰瘍ができて入院患者が増えている、誰かこれを何とかしてくれないか」という医局会での発言がきっかけでした。ある日、別の用事で教授室を訪れた際、「先生、この前おっしゃっていた糖尿病の件はどうなるんですか?」と何気なく質問したところ、「あー、そうやなー、君やれ」という指令が下りました。「えー? 僕がですか?」というわけで、それまで教室でこういった潰瘍、壊疽病変を専門にしていた先輩もいませんでしたので、まったくの手探り状態からスタートしたのが20世紀も終わりかけの1999年。以来、十数年にわたり、潰瘍とくに糖尿病を中心とした病変をずっとみてきました。

足病変をもつ患者さんがだんだん増えているというのは間違いなかったようで、2003年に「フットケア研究会(仮称)」なる現在の日本フットケア学会の前身にあたる研究会に参加する機会を得ました。じつは、それ以前から「皮膚科糖尿病循環障害研究会」というきわめてユニークな研究会の事務局を大阪市立大学におかせていただいて、2000年から年に2回開催していたので、フットケア研究会の代表である熊田佳孝先生に「われわれこういう研究会をやっております」と御挨拶をしました。それがきっかけで、この学会にどっぷりと浸かるこ

とになり、そうこうしているうちに、講演、執筆、学会開催依頼などがどんどん舞い込んでくるようになりました。

足病変は、単独診療科で解決するものではなく、さまざまな職種、診療科とコラボレーションしながら診断や治療を進めていく必要があります。大阪市立大学では、毎月1回「足のカンファレンス」を行っています。これには、糖尿病内科、形成外科、放射線科(カテーテル治療担当医)、ペインクリニック、看護師そして皮膚科が参加し、問題になっている患者さんのディスカッションをします。多いときには20名ほどが集まり、いろいろ議論することになります。

院内カンファレンスだけでなく、もちろん学会でも他科の先生方との交流は、また違った世界なので大変楽しく、みんなで和気あいあいとできるところが最大の魅力です。学会開催地によっては、みんなで温泉に浸かったりすることもあり、文字通り裸の付き合いといった仲間もできます。

皮膚科はどちらかというと、他科との交流が少なく内向的なイメージがあるかもしれませんが、しかし、いろいろな診療科の知識を得ることで、診療にもものすごく幅が生まれます。今後の少子高齢化を考えると、痤瘡やアトピー性皮膚炎などは減少傾向となり、糖尿病患者の増加とともに足を診る医師のニーズは高まる一方です。これを機会に、この方面に熱心な先生が増えることを期待しております。